

# アジア・太平洋戦争下、神戸港における朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜の強制連行・強制労働

飛田雄一

## 論文要旨

アジア・太平洋戦争の時期に神戸港に朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜が強制連行され、過酷な労働を強いられた。船舶荷役、造船を中心とする職場で、日本人労働力の不足を補うために動員されたのである。神戸港においては、①朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜が同じ地域で労働していること、②資料が他の地域に比べて多く残されている、③体験者の聞き取りがされているという特徴をもっている。これらの特徴に留意しつつ研究することにより、神戸港の強制連行問題についての理解が深まる。従来の強制連行研究において、特定の地域におけるこの三者の実相について総合的に記述した研究は少ないといえるが、本論文では「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」による調査研究の成果を踏まえて、新しい資料も紹介しつつ、より実相を明らかにしようとするものである。

## はじめに

アジア・太平洋戦争下、神戸港における朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜の強制連行・強制労働についての研究は、一九八九年十月の「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」(以下、「調査する会」とする)<sup>1</sup>の結成以降、同会メンバーによる調査活動により進展をみせている。<sup>2</sup>

本稿でいう「神戸港」には、直接的な港湾労働である船舶荷役の他に造船所および関連企業を含めることとした。

この地域における強制連行・強制労働問題の第一の特徴は、朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜が同じ地域、一部では同じ企業で強制労働を強いられたという点である。日本全国に他に事例がないわけではないが、調査する会はこの点に重きをおいて調査活動をおこなった。

第二の特徴は、他の地域に比して比較的多くの資料が残されていることである。朝鮮人に関しては、一九九一年に旧労働省の倉庫で発見され韓国政府に引きわたされた一九四六年作成の「厚生省名簿」がある。強制連行された朝鮮人の名簿の一部であるが、全体の数六六、九四一名のなかで兵庫県分が一三、四七七名と比較的多い。<sup>3</sup>この中に神戸港関連のものも含まれている。中国人についてはよく知られているように外務省が一三五の事業場について報告書を残しているが、その中に日本港運業会神戸華工管理事務所・神戸船舶荷役株式会社『昭和二十一年三月 華人労働者就労顛末報告書』（以下『神戸港報告書』<sup>4</sup>）も含まれている。連合国軍捕虜については、とくに多くの資料が残されているわけではないが、いくつかの文献の他に、当時シンガポールから神戸に移送されたジョン・レインは回想記<sup>5</sup>に自身の体験を生々しく書いている。第三の特徴は、朝鮮人、中国人、連合国軍捕虜それぞれについて生存者の証言が得られているということである。歴史研究には体験者の証言は欠かせないものであるが、朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜の三者についての証言を得ることができている。

調査結果については、調査する会編『神戸港強制連行の記録―朝鮮人・中国人そして連合軍捕虜―』（明石書店、二〇〇四年、以下、調査する会『記録』とする）が出版されている。他に中学校の副読本として作成された調査する会編・発行『アジア・太平洋戦争と神戸港―朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜―』（発売・みずのわ出版、二〇〇四年、以下、「調査する会ブックレット」とする）がある。<sup>6</sup>

本稿では、神戸港における強制連行・強制労働問題について、以上の刊行物に掲載されていない新たな資料も紹介しつつその実態を明らかにしたいと思う。

## 一・『神戸市史』『社史』等における記述

### ●『神戸市史』

本テーマについて『神戸市史』で充分に書かれているとは言えない。

『神戸市史』第三集産業経済編、第四章「海運」、第二節「港湾運送と倉庫」に三項「草の墓標」を設けて「中国人の強制労働」「俘虜の使

用「朝鮮人の強制労働」について触れている。中国人については、『草の墓標』（一九六四年）の次の部分を引用している。<sup>7)</sup>

「神戸船舶荷役KKが労役した中国人の、平均一日の就労時間は一〇時間で……最大二四時間（食事および休憩時間を含む）となった」（「事業場報告書」）／文字どおり二四時間労働であった。／しかし、神戸では「海岸宿舎」と名付けた海岸倉庫に、ムシロをしいてその中におしこめ、そして「暖房設備はなかった」と事業場は言っている」

そして神戸港の受け入れ数として、連行者九九六、転出者三三〇、死亡者一七を紹介している。

連合国軍捕虜については「俘虜」に関連する記述として『三井倉庫五十年史』（一九六一年）の「このころになると労働者の不足がようやく目立ち、これを補うために、俘虜の使用がはじめられた。これは同年（一九四二年）一月二二日公布、即日施行された陸軍省令俘虜派遣規則によるものであって、当社では神戸支店、および大阪支店埠頭・桜島両倉庫に多く配置され、その他の支店でも臨時の使用がおこなわれた」を引用し、「これは文字どおり俘虜であったかと思われるが、当時強制連行者は一般に俘虜としてみられていたから、混同されてもいたようである」としている。

朝鮮人については次のように記している。

「朝鮮人の強制連行者については、はしけに使ったというような話も聞いたが、朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』（昭和三九刊）には神戸のことは記されていない。ところが『大阪港史』第三巻には、次の記述がみられる。『さらに朝鮮総督府と交渉して、半島労働者の配慮を完了、うち二〇〇人は倉庫荷役の完璧を期するため、とくに東京・大阪・神戸・関門各港に増配した。／大阪港四〇〇人（倉庫五〇）／関門港二五〇人（倉庫五〇人）／神戸港二〇〇人（倉庫五〇人）』／そして、朝鮮における強制連行の状況を詳しく記している。／右に述べたような一連の事実は、港運会社上層部以外は港湾関係者であっても一般神戸人には知られていない。」

この「神戸のことは記されていない」というのは「神戸港」のことだが、いずれもこの『市史』が書かれた時点で刊行されていた本を引用するかたちで紹介するにとどまっている。

『新修神戸市史 歴史編Ⅳ 近代・現代』（一九九四年一月）第四章「二五年戦争下の神戸」第五節「戦争への国民動員と敗戦」に「神戸市域における朝鮮人」があるが、そこでは朝鮮人強制連行真相調査団編著の『朝鮮人強制連行調査の記録』兵庫編（一九九三年）を引用して、

一九九〇年八月に労働省倉庫に存在していたとして発表されたいわゆる「厚生省名簿」の内容を紹介しているにすぎない。そして末尾に「また、すでにみたように敗戦時の兵庫県在住の中国人は二一四四人、台湾人は二四〇〇人とされており、その多くは神戸市域に集住していたと思われるが、これらの人々の実態については明らかとなっていない」とされている。<sup>(8)</sup>

『新修神戸市史 産業経済編Ⅲ 第三次産業』第二章「第一次世界大戦から第二次世界大戦まで」第四節「港湾運送・倉庫業」1「港湾運送業の発展」のなかに「戦時体制下の港湾運送業」で、朝鮮人・中国人について簡単にふれているが、朝鮮人については一九九〇年に公表された「いわゆる朝鮮人徴用者等に関する名簿の調査について」にふれて神戸船舶荷役株式会社の朝鮮人労働者数一四八人、終戦時一一〇人という数字を紹介している。

以上、いつかの『神戸市史』の記述は、記述の時点で刊行された本等の内容を反映させようとする努力はうかがえる。

●『神戸港開港百年史』

神戸市『神戸開港百年史 港勢編』では、当時の港湾労働者不足の問題にふれながら、先の『神戸市史』第三集の内容を紹介している。<sup>(9)</sup>

●『兵庫県警察史』

『兵庫県警察史』では、第二章「総力戦体制と警察」第一節「国家総動員の実施」で、県下の捕虜収容所の収容人数について姫路在住藤森明生氏談として神戸（東遊園地内）約四百名、川崎（丸山公園内）約三百名としており従事業務はそれぞれ「兼松倉庫荷役」「川崎造船労務」としている。また、『播磨造船所五〇年史』より「華工」の記述を引用し、清沢冽『暗黒日記』より阪神間の重工業会社で働く連合国軍捕虜に関する部分（一九四三年十月六日）を引用している。<sup>(10)</sup>

●『社史』

次に関連する社史について検討してみる。

川崎重工業株式会社は、社史に「同年（一九四三年）末には内地における徴用労働源が不足を告げるに至ったので、その範囲を朝鮮に拡げ、翌一九年（一九四四年）には、艦船工場では約一、六〇〇人の半島出身の「産業戦士」を迎えた」と記されている。ただし後述するいわゆる厚生省名簿に、川崎製鉄兵庫工場二二一名、同葺合工場一四〇一名の名簿があるが、艦船工場のものはない。

同株式会社社史の「年表・諸表」<sup>12</sup>に上記の内容と関連する、以下の記述がある。

一九四四年十一月一日の「当社主要事項」に「艦船工場に朝鮮人徴用工入所」

三菱神戸造船所社史には、「軍需生産の労働力の増強を図るため、十六年（一九四一年）十一月二十九日当所従業員約一六、〇〇〇名を初めとし数次にわたり現員徴用が行なわれた。ついで重要産業従事者以外の徴用・朝鮮青少年の徴用・学徒動員・女子挺身隊・特有技能者の結成する奉公隊等によって、終戦時の従業員数は実に三一、〇〇〇余名の多きに達した」と記されている。<sup>13</sup>

三菱重工業神戸造船所については、厚生省名簿に一九八四名の名前がある。

強制連行問題に関しては企業側の当事者の記録が比較的少ないが、この三菱重工業神戸造船所で労務係として働いていた宮崎勝浩の「旧労務の思い出」の中で次のように触れられている。<sup>14</sup>

「第一回徴用工が入所した際、担当の喜田貞三君が初めての仕事に心身とも過労になった為労務課長の辞令を枕元に死去しましたが、その後二回、三回と徴用工の入所があり、朝鮮人が入所した節は、朝鮮人に欠く事の出来ない赤唐辛子の入手に百方手を尽くし、舞子の寮の食堂で朝鮮人が食事する顔を見た時は、思わずホッとしました。そして兵庫署の特高主任に喜ばれ、それ以後特高署員とも心易くなって、色々の情報を入手したものでした。」

## 二・朝鮮人の場合

朝鮮人強制連行は、一九三八年の国家総動員法に基づいて翌三九年「募集」という形態で始まった。しかしこの方式で労働者を集めることが困難になると四二年「朝鮮人労働者活用ニ関スル方策」を閣議決定して面など各行政単位毎に労働者数の割当を求める「官斡旋」方式に転

換する。戦争末期になるとそれでも必要数を集めることができなくなり四四年九月、「徴用」方式を朝鮮半島においても実施するようになった。<sup>15)</sup>

兵庫県では、早くも一九三九年に朝鮮人が連行されて来ている。神戸に強制連行された朝鮮人の正確な人数を把握することは困難であるが、先述の「厚生省名簿」によって比較的多数の名前を確認することができる。日本政府は、名簿の所在、種類、人数等について発表したが、国内では公表されなかった。その名簿は韓国政府に引き渡された後、在日本大韓国民団を経由して、一九九七年七月、日本でも労働者の名前も含めて公表された。これは厚生省勤労局の指示によって一九四六年に都道府県が行った朝鮮人労働者に関する調査のうち一六県、六万六九四一人分である。内訳は、官斡旋・徴用四万九一八二人、自由募集七二一七人、不明一万〇五四二人となっている。<sup>16)</sup>記録が残っていない都道府県の方が多いが、兵庫県関係のものは、一万三四七七人の名前があがっていて最も多い。名簿によると兵庫県下で最も人数の多いのは播磨造船所の二二〇二人、ついで三菱重工業神戸造船所一九八四人、川崎重工業葺合工場一三九八人、三菱生野鋳業所一三四〇人となっている。他に神戸関係では、神戸製鋼所本社工場四一三人、川崎重工業兵庫工場二二一人、神戸貨物自動車一六二人、神戸船舶荷役一四八人、日本制動機一一八人などとなっている。<sup>17)</sup>

#### ●神戸船舶荷役株式会社

神戸船舶荷役株式会社に連行された一四八人の朝鮮人については、この名簿から次のことが明らかになっている。全員が官斡旋であり、入所年月日は、一九四四年九月一〇日、六五人、九月一四日、二四人、一月二三日、五九人で職種はすべて沖仲士、退所事由については、死亡一人、病気送還一〇人、逃走二七人、帰国一一〇人（四五年一〇月八日）となっている。年齢は、一〇代三八人、二〇代六六人、三〇代三人、四〇代一〇人、五〇代二人で入所時において最年少は一四歳、最高齢は五四歳であった。

この名簿に基づいて二〇〇〇年二月、本籍地をもとに韓国の自治体に問い合わせを行った。送り先は、忠清南道、全羅北道、慶尚南道の二市二邑二三面の計二七カ所である。最終的に四四％の回答率であったが、生存者が確認できたのは全羅北道金堤市龍池面の李南淳ただ一人であった。二〇〇〇年八月、調査する会が現地調査を行い李南淳（一九二七年生まれ、連行当時一七歳）にインタビューした。以下はその時の回答の概要である。

一九四四年九月に面事務所の役人（参事）が令状をもってきたので仕方なくついていった。準備をする時間もなく逃げることもできなかった

た。汽車で釜山に行き、そこから連絡船に乗った。船が大変で「腸のなかのものが全部あがってきてもどした」。その後汽車で神戸に行った。仕事は年が幼かったので事務所の掃除などだった。一カ月後に病気になる。太股が腫れて膿がでた。病院には行ったが後遺症が残っている。<sup>18</sup>

神戸船舶荷役に朝鮮人がいつから働くようになったのかは明らかではないが、一九四三年七月、「湊川神社に参拝した荷役に来援の半島人部隊」という写真とともに掲載された次のような新聞記事がある。<sup>19</sup>

「朝鮮人名古屋より神戸へ／船舶荷役に一肌／名古屋から半島人部隊来援助

神戸港の荷役増強に一役脱がうと遠路はるばる名古屋から愛国の念燃ゆる半島人荷役労力奉仕隊一行七十余名が神戸船舶荷役株式会社錦見所長引率のもと二十八日午後三時八分神戸駅着列車で来神した。直に湊川神社に赴き花房湊川神社主典により修口を受けてのち神戸国民職業指導所有方総務部長の訓示があつて一行は約一週間滞在し、港湾荷役に挺身することになってゐる。」（□は判読不明の文字。以下同じ。）

この名古屋から連れてこられた朝鮮人は神戸では短期の労働であつたと思われるが、一九四三年段階で、朝鮮人が神戸の船舶荷役に従事させられていたことを示している。<sup>20</sup>

#### ●川崎重工業

ほかに神戸港関連では、厚生省名簿にはないが川崎重工業艦船工場に朝鮮人が連行されてきている。すでに触れたが同社社史に次のような記述がある。

「同（一九四三）年末には内地における徴用労務源が不足を告げるに至つたので、その範囲を朝鮮に拡張、翌一九九年には、艦船工場では約一、六〇〇人の半島出身の「産業戦士」を迎えた。」<sup>21</sup>

この一六〇〇人のうちの一人、朴球會が兵庫県社町にいた。朴球會の話によると当時の状況は次のようであつた。一九四四年に徴用令状が来て川崎重工にきた。艦船工場東垂水第一寮に収容され、約一ヶ月の訓練ののち主に潜水艦の伝声管をつくる仕事に従事した。とにかく空腹だったことを記憶している。四五年六月の空襲で寮の仲間一六名が亡くなつた。寮には警備員がいたが工場への往復のときに逃亡者が多くでた。<sup>22</sup>

川崎重工業については、特殊鋼工場についてのものだが、次のような「銓衡場に於ける半島人の徴用嫌避の実相」と題する興味深い記録が

残されている。<sup>23)</sup>

「去る（一九四四年）十月二十七日新義州府に於て施行せられた兵庫川崎重工業株式会社特殊鋼工場徴士の銓衡状況に付ての情報が新義州検事正より齎されたのであるが、銓衡場に出頭した全員悉くが意気沮喪して生氣なく、而も凡ゆる卑屈な手段を弄して徴用を免れようとする気運が極めて濃厚であった趣である」。この時二二歳から二三歳の青年一〇〇名の割当数に対して三八六の出頭命令書が出された。実際に出頭したものは二七四名、出頭せずに「事由調査中」のものが一二二名、徴用令状を交付したのは一二〇名であるが、「適格者九十一名に過ぎざるを以て考慮中の者より二十九名を適格者に繰上げ一二〇名を銓衡決定」した。そして「出頭者の動向」については次のように記している。

「半死人の如き態度に出て徴用官に於て激励するも何等感激せざるのみならず町医者診断書を提出して身体の故障を訴へ、或は身体検査に當り専任医官（道立医院内科々長）に対し僅な身体の故障を誇大に告げ、身体検査に依り不合格者となりて徴用より免れむとの気配濃厚なるものあり。……徴用出頭命令書を受領するや町医者或は道立医院医官を訪問し、身体の不健康なることの証明を受けんと總有手段を講じたる形跡あり。」

さらに医師の話として、

「第一次徴用より今回迄の間に何れも出頭命令書の交付あれば其の時より毎晩の如く夜間私の家を尋ねて何とか病名を付けて忌避出来る様にと哀願するもの数を知らず」という話も紹介されており、徴用の厳しさがうかがい知れる。

川崎重工業葺合工場については朝鮮人労働者一三九八名についての分析がある。それによると江原道の約三百人を除けば三八度線（休戦ライン）以北の出身者が約八割を占め、一九四三年一月から四五年四月まで計一三回にわたって連行されている。募集した時期は四月が五回と最も多く三月が四回、一月、十一月、十二月が各一回と農繁期を避けた募集となっている。死亡者は二五人で、病死九人、戦災七人、公傷五人、戦死二人、斃死、死亡各一人となっている。また逃亡は四五四人（三二・五％）もいた。その他は、満期三三一人、一時帰国八一一人、病気送還二一人、不良送還八人などとなっている。未払金は総額で七七、六〇三円、一人当たり五五・五一円となっている。満期・残留の三三五人の未払金が最も多く総額三四、一七〇円、一人当たり一〇二円であるのに対して、逃亡・自由・不明の九〇九人については総額三四、五



四二円、一人当たり三八円となっている。<sup>24)</sup>

集中的に連行されている江原道の二郡一一面の八九人について自治体に問い合わせを行った。横城郡については安興面、甲川面、書院面、隅川面、屯内面、晴日面、横城面の七面、洪川郡については化村面、斗村面、南面、内面の四面で、そのうち四面から回答があったが生存者が確認できたのは安興面の一名であった。面事務所の職員が転居先を調査してくれ、京畿道安養市東安区在住の鄭壽錫（一九二三年五月一日生）にお会いすることができた。鄭は四三年四月四日に三菱重工神戸造船所に入所しているが、翌四四年から朝鮮人徴兵制度が始まることや当時一週間に二、三回朝九時から夕方六時まで行われていた軍事訓練が契機となっている。幼くして父を亡くし九歳上の兄と母を支えた暮らしの中で徴兵されるより前に、また農作業のできない軍事訓練をするより日本に行って食料を一人分減らす方がいと考えたという。<sup>25)</sup>

●『内外労働週報』

戦争中、内外労働研究所から発行されていた『内外労働週報』に「川崎重工業製鋸工場の半島労働者管理要綱」という記事がある。<sup>26)</sup>「本要項に於て「訓練工」と称するは移入半島人労働者を謂う」とし、その訓練工を「有能なる産業戦士に育成すると共に環境順応の生活を指導して皇国臣民たる資質を錬成」とすると謳う。指導綱領には、皇国精神の昂揚、内鮮一体の完成、生活様式の内地化確立、職域奉公の徹底があげられている。具体的な訓練科目として「皇民行事、修身、公民、国語（話し方、読み方、書き方、綴り方）、国史、儀礼、音楽、敬神思想、情操、時局認識、その他日本人としての戦時生活に関する事項」があり「訓練工同士国語にて会話せしめ「方言」を使用せしめざること」とある。また食事については「入所後一ヶ月にて公定配給を以て満足せしむ」「辛き食事は漸次遠ざけしむ」などと記されている。

●「神戸造船所への派遣」

神戸港に強制連行された朝鮮人の証言は限られているが、川崎重工業に連行されたパク・ヨンガツプと川崎造船所に連行された張在億（日本名・朝倉庸和）の二人のものがあり、ともに食糧不足と厳しい監視について語っている。また二人とも一九四五年初夏の神戸空襲の恐ろしい体験を語っているが、パク・ヨンガツプは東垂水の宿舎で空襲により重傷を負っている。<sup>27)</sup>

在米韓国人の声を集めた『黒い傘の下でー日本植民地に生きた韓国人の声』にチョン・ジェス「神戸造船所への派遣」がある。<sup>28)</sup>チョン・ジェ

スは、一九二三年全羅北道生まれで、解放後釜山で会社を営み朝鮮戦争後はソウルでその仕事を再開。引退後に子どもたちの誘いを受けてアメリカに移住した。証言は次のとおりである。

「着いたところは神戸です。神戸には、三菱と川崎というふたつの大企業の造船所がありました。衛兵たちに追い立てられるようにして、神戸の郊外にある細長い兵舎に入れられました。私たちのグループには六千人の朝鮮人がいましたが、三千人は三菱、三千人は川崎と分けられました。その全員がああ兵舎に詰めこまれたのです。」

「食事はいつも豆、豆、豆。白米にはお目にかかったことはありません。(中略)たまに、小さなお椀に入ったスープがでることもありました。それでさえ、ひとり分はほんのひとくちしかなかったです。若く食べ盛りの私たちは、いつもおなかをすかせていました。」

この兵舎は先の社史にも記述されている宿舎だと考えられる。彼は、空襲のこと、連合国軍捕虜のことなどにも触れている。そして、日本語の話せない朝鮮人への日本軍将校の仕打ちに反抗したことをきっかけとして、この人は危険を犯して逃亡をはかり、浜松まで逃げたときに幸運にもかくまってくれる朝鮮人と出会い、朝鮮に無事渡ることができたのである。

#### ● 「大手寮訪問記」

川崎重工業の塩屋の宿舎については、神戸新聞に二回にわたって「美談」も紹介しながらカット入りでルポの記事が掲載されている。

「寮長は快男児の中尉／半島の若き訓練工【大手寮訪問記】

山陽電鉄大手停留所山側のアパートかな、と思われる明るい感じの建物それが川崎製鋼工場の訓練工たちにとっては楽しい我が家の大手寮なのだ、「やあー」寮長の寺井氏だ。北支中支を転戦した陸軍中尉で、昨年十一月初旬、単身朝鮮に渡り〇〇名の訓練工たちを糾合し得たのだが、船の都合で出発できず、京城の某広場で半ヶ月も待機、不安と焦燥に眠れぬ夜を続けたが零下七度の身を切るはうな寒風を衝いて行軍に、分隊教練を敢行した。寮に着いた翌日からもう烈しい訓練だ。」<sup>(2)</sup>

「何かしら熱いもの／半島の若き訓練工【大手寮訪問記】

つひ最近のこと、隣の大手町二丁目のクリニング屋さんから出火、寮長は直ちに非常呼集を行った、慌てふためくかと思ひの外電撃の整列ぶりだった。宙を飛んで火と闘ひ消防自動車 came 時には隣家への延焼を喰い止めてゐた、また最近に光口(不明)明洙君と山本宗平君の

父君が病死したといふ悲報があったが両君は、いひ合わせたやうに帰らなかった。

私たちは、招集令を頂いたつもりなのです、戦場にある皇軍兵士は父母が死んだからといって、内地に帰ってくる事が出来ずか……  
地下の亡父も帰国せぬ方を喜びます。

娯楽会は多士済々、まづ日蓄当選歌手といふ経歴をもつ綾城幸作君、朝鮮民謡コンクールに一等当選したといふ金沢潤錫君、ギターの名手里見君などが演技を御披露に及ぶ、最近工場の労務課長からハーモニカを寄付されたので、訓練工たちは大喜び、日々点呼までの賑やかさ、それから野菜も作ってゐる。見ると寮の東手の十坪ばかりの畑に葱やしやもじ菜が行儀よく並んでゐる、夜勤らしい訓練工が二、三人裸足で野菜の世話に没頭してゐると、突然、隊長殿！蛇です、蛇ができました、その中の一人が素つ頓狂な声をあげて、いきなり跳ねあがった、青大将がその足もとを悠然とのたつてゐる「何だ、大きな男が！、蛇はどうもしやせんさ、安心しろ」寺井寮長が怒鳴ると、その訓練工は極り悪さうに照れながら頭を掻いた「無邪気なもんですよ！然しどうです、内地語も中々流暢なものでせう」この蛇事件は記者に何か知らぬ熱いものを感じさせた（終）多木生<sup>30</sup>

以上の記事はもちろんそのままに受け取ることができないが、当時の雰囲気伝える珍しい記事ではないかと思う。

また「朝鮮の対戦争寄与は経済面にあつてはアルミ、マグネなど軽工業や製鉄などますますその重要性を高める反面、労力面にあつても『移入労力』のわが内地労力に占める比重は、特に鉾山方面において六割以上を占むるに至つた、重工業県たる本県にも移入労務者数は神戸、尼崎方面を主として〇千名に達し、これらは殆ど純真な年頃の青年ばかりである、大東亜民族十億を数へるとはいへ、それら東亜の解放への主体力となり、内地に来て内地人と協力してゆけるのは、その生活、風俗、習慣、国語を解する半島出身者以外に求められない、この点に鑑み本社は朝鮮労務者□□□の来神を機に本社では県協和会と共催で、県下の主要工場代表者三十余氏の出席を乞ひ、両者のあいだに忌憚のない事情の交換と懇談を行った」という神戸新聞社主催の座談会が開かれたが、その記事の見出しは「風俗習慣への理解／来てよかつたと思はせて欲しい」となっている。<sup>31</sup>

一九四五年にはいると状況がますます厳しくなっていくが、朝鮮人労働者の「美談」を紹介しつつ必要性を強調する記事も登場する。この記事にあるように強制連行された朝鮮人が志願兵になった事例があるのかについては、確認できていない。

「生産へこの特攻魂／半島同胞／いまちや職場の大黒柱／粘りと純情で明朗敢闘ご奉公／配置の競願／川崎重工業

共に米英を撃たう、航空兵として、また設備隊員として前線に奮戦している半島同胞は兵庫県下の軍需工場に在っても半島生産特攻隊員となって生産増強に涙ぐましく敢闘を続けてゐる、温情の寮長に続きまた親子、兄弟が生産現場に挺身し、さらに職場においては「一日も早く重要作業に配置して下さい」と嘆願するなど生産戦場に内地と同胞と一体となり？い増産意欲を盛りあげ、特有のねばり強さを通し素晴らしい能力をあげ工場の人々をいたく感激させてゐるが、いま半島生産隊の力強い姿にふれて見よう。

□□川崎重工某工場の生産隊列に半島出身青年が加わったが新春とともに訓練工の肩書きとともに早くも現場に姿を現わして敢闘してゐる、既に彼らの先輩多数が一年有余の前からこの工場に在って日毎に示してきた逞しい生産能力が内地工員たちを優に凌駕してその刺激にもなっていることから今度の増員に際しても特に採用された訳でもある。

二十名余りは内地言葉に不自由であるが、大体に教育程度も上に在るものばかりで光山虎雄君は日大専門部出身平安北道所の□□だった、金原龍裕君は法政大専門部出身でもある、会社に着いて訓練工の宿舎と定められている芦屋市打出寮に落着いて二三日もすると「一日も早く現場に就かせて下さい」と嘆願して班長たちに強い感銘を与えた。<sup>(32)</sup>

当時、神戸工業専門専門学校（現神戸大学工学部）の学生であった福井新（兵庫県明石市在住）は、川崎重工に学徒動員されたが、自宅の明石から国鉄（現在JR）で通勤するとき途中の舞子駅、塩屋駅から作業服を着た朝鮮人が乗り込んだことを記憶している。また、「会社（川崎重工）の前でたき火にあたっていた時に知り合った人集め担当の男は『嫌がる朝鮮人を抜刀して脅し、無理やり集めた』と自慢げに話していた」とも語っている。<sup>(33)</sup>

### ●空襲と朝鮮人

神戸は米軍による空襲が激しい地域のひとつであるが、空襲をうけた朝鮮人の次のような証言がある。<sup>(34)</sup>

「空襲はひどかった。戦争末期で空襲は毎日のようであった。一九四五年にも初夏にB29の大規模空襲で神戸市が火の海になり、ほとんど廃墟になってしまった。空襲でどれだけ多くの人が死んだのかは知らないが、数日間仕事ができないので出てくるなというので出勤しなかったが、後で出勤してみると市内の路地ごとに死体があふれていた。」（パク ヨンガップ、労働者、神戸市川崎重工業に徴用）

「ほとんど毎日空襲があり、寄宿舎は木造建築で焼夷弾の空襲によって全焼はしなかったが、機銃掃射によって多くの徴用者が死んだ。空襲

がある度に、近くの海に行けば大丈夫だと思つて海の方へ逃げ、またあるときは山に待避した。一九四五年の夏のある日、空襲があったが、私は顔と手に焼夷弾を受けてやけどを負い、会社が指定した明石病院へ送られた。顔と両手両足にひどくやけどを負ったため、一緒に働いていた同僚たちも顔を見分けられなかった。やけどしたところには、水ぶくれがぶどうの房のようにぶくぶくにできた。その病院でも、負傷していたために空襲があつても逃げる事ができないまま、恐ろしさに震えていなければならなかった。治療は病院でしてくれた。多くの人が負傷し、金ばえが群れをなして飛び回る劣悪な環境の中で、二カ月ぐらい治療を受けた。」(張在億、創氏名：朝倉庸和、労働者、神戸川崎造船所に徴用)

一九四五年八月一五日のことについて先のパク・ヨンガツプは「工場で働いていたが、昼食時に特別談話があるというので行つてみると、天皇が降伏するという放送で日本人が涙を流していた。われわれはこんなに簡単に解放になるなんておもいもよらなかった。」と証言している。その後、パク・ヨンガツプは「解放になると、仕事はさせられなかった。そのまま寄宿舎で待機していたが、解放後一〇月ごろになつてようやく、会社の引率で約八百名が関釜連絡船に乗つて一緒に帰つた。朝鮮人労働者の中でそれなりに教育を受けた人たちが、逃走して捕まつてゐる人を釈放させるなどいろいろ活動して、一日も早く帰つてほしいという要求を会社にしたため、比較的早く帰ることができたようだ。」と語っている。一方、張在億は、「解放になると会社が、故郷に送り返してくれるということだったがずると遅れ、帰りたい人は各自帰れといたので、私は一刻も早く故郷へ帰るために各自が少しずつお金を出し合つて船を準備した。お金のない人は、朝鮮に帰つてから払うという条件で小さな船を借りたが、だいたい一〇〜二〇名程度が乗れるほんとうに小さな船だった。なにせ小さな船なので台風にも遭つたらとても危険な状態で、三日間を船と運命をともにしながら玄界灘を渡り、釜山港に到着した」と証言している。

### 三．中国人の場合

戦時中日本には三八、九三五名の中国人が強制連行され一三五の事業所で強制労働をいられた。その内六八三〇名(一七・三%)が死亡している。一九四六年、日本政府は、『華人労働者就労事情調査報告書』、いわゆる『外務省報告書』を作成したが、その時、一三五か所の事業所すべてについて『華人労働者就労顛末報告書』(いわゆる『事業所報告書』)を作成している。<sup>35)</sup>『神戸港報告書』は、そのうちの一冊で、神

戸港には一一七番という番号がふられている。<sup>36)</sup>

中国人強制連行は一九四二年一月二七日に閣議決定された「華人労務者内地移入ニ関スル件」によって始まる。<sup>37)</sup> その「第一方針」には、「内地ニ於ケル労務需給ハ愈々逼迫ヲ来シ重筋労働部面ニ於ケル労力不足ノ著シキ現状ニ鑑ミ左記要領ニ依リ華人労務者ヲ内地ニ移入シ以テ大東亜共栄圏建設ノ遂行ニ協力セシメントス」(『外務省報告書』、一三九頁ほか)と書かれている。

#### ● 中国から神戸港へ

神戸港に連行された中国人は九九六名、そのうち三三〇名が、神戸空襲により神戸での作業が困難となつてのち、室蘭、七尾、敦賀に「移送」されている。『神戸港報告書』、『外務省報告書』(『資料 中国人強制連行の記録』、三一〇～三一三頁)および「中国人強制連行に関する報告書 第四編 連行された中国人の名簿」(『資料 中国人強制連行の記録』、五六三～五七三頁)より神戸港に連行された中国人について整理すれば次のようになる。以下のように三つのグループ、①福昌華工(特別)、②日華労務(自由)、③華北労工協会に分けられている。<sup>38)</sup>

##### ① 福昌華工(特別)

一九四三年九月九日に一次(二一〇人)、一九四四年五月四日に二次(二〇三人)あわせて四一三人が神戸に到着した。一次の二一〇人については名簿がないが、全員が一九四四年四月一五日に集団送還されたことになっている。名簿のある二次の二〇三人については、呉日敬、梁永華の二名が死亡している。李興旺、馬宝元の二名が残留し、残り一九九名が一九四五年四月二四日に集団送還されている。

##### ② 日華労務(自由)

三次(一九四四年九月二六日神戸着、五一名)、四次(同年一〇月二日、五〇名)、五次(同日、三二名)、計一三三名が強制連行され、このうち一三〇人が一九四四年壱二月五日、更に港運函館に強制連行されている。<sup>39)</sup> また一九四五年二月一五日には港運敦賀に一人連行されている。このなかで兪詳興が死亡している。

##### ③ 華北労工協会(六次 訓練生、七次 行政)

六次は、三〇〇人が一九四四年一〇月三日神戸に到着している。神戸では、黄昭正、趙来運、陳流科、龍振三、張天光、李修義、任永運、康的紀の八名が死亡した。六次、三〇〇人のなかで九九人が敦賀に、七尾に一〇〇人が更に連行された。敦賀に連行された中国人は更に七尾

に移されている。七尾では、神戸より移動させられたもののうち、高德銀、朱新修、李鴻昌の三人が死亡した。最終的にこの六次の被連行者のなかで神戸に生きて残った九三名が一九四五年一月六日に集団送還された。<sup>40)</sup>

最後の七次は一五〇人で、神戸までの車中で姚洞が死亡し、神戸では趙福榮、耿和善、王徳榮、張満良、郭興元の五名が死亡した。そして残留した王樹林を除く一四三名が同じく四五年一月六日に集団送還されている。<sup>41)</sup>

「福昌華工」とは福昌華工株式会社のことである。この会社が「満州」での強制連行を担当していた。「特別」というのは特別供出のことで、「荷役造船等ノ経験ヲ有スル華工ヲ中心トシテ編成セラレ素質最モ良好ナルノミナラズ死亡率亦低シ」と言っている。このグループは大連の荷役労働者を強制連行してきた「試験移入」段階のもので、労働者を借りてきたというようなものらしく、それぞれ一九四四年四月の段階で送還している。『神戸港報告書』には「試験移入ノ結果ハ概ネ良好ナル成績ヲ収メタルヲ以テ昭和十九年二月二十八日ノ次官會議決定ヲ以テ曩ノ閣議決定ニ基キ之ガ実施ノ細目ヲ定メ昭和十九年度國民動員計画ニ於テ三萬名ヲ計上愈々本格的移入ヲ促進セシムルコトナレリ」と書かれているものである。

「日華労務」は「華中ニアリテハ労務供出ノ目的ノ為特設セラレタル日華労務協会之ニ当リ」という協会である。その協会が「主要労工資源地ニ於テ条件ヲ示シ希望者ヲ募集スルモノナリ」という「自由募集」で合計一四五五人を強制連行している。

行政供出と訓練生供出が中国人強制連行の中でもっとも数が多い。合計三八、九三五人名のうち行政供出が二四、〇五〇名、訓練生供出一〇、六六七名で合わせれば全体の八九・二％にも達する。これをすべて行なったのが華北労工協会である。

その「行政供出」は、「中国側行政機関ノ供出命令ニ基ク募集ニシテ各省、道、県、郷村ヘト上級庁ヨリ下部機構ニ対シ供出員数ノ割当ヲナシ責任数ノ供出ヲナサシムルモノ」であるという。『外務省報告書』もこの行政供出は「問題ヲ包蔵スル危険アリ」「半強制的ニ供出セザルヲ得ザルニ至ラシメタリ」(『中国人強制連行資料』二二二頁)と不備を認めている。

訓練生供出というのは、「日本現地軍ニ於テ作戦ニ依リ得タル俘虜、帰順兵」を收容所で「訓練」したのちに強制連行したものである(『中国人強制連行資料』、一一一〜一一三頁および二一五〜二二二頁)。

●神戸港における中国人死亡者

神戸では、すでに述べたようにあわせて一七名が亡くなっているが、後に発行された『中国人殉難者名簿 附 中国人行方不明者名簿』には、一七名の名前とともに以下のような記述がある。<sup>22)</sup>

「死亡者処理状況

(イ) 死亡診断書署名者 事業場Ⅱ佐野実、正木忠生、満田昇、隈鎮雄、中川昇、梶山錠吉、吉岡利

(ロ) 火葬許可書の有無 不明

(ハ) 遺骨保管場所 神戸市金楽寺、教西教会、金光寺、

一九五七年兵庫慰霊実委の調査に対し、正念寺―旧教西教会―の住職は、「中国人の遺骨を保管したが、終戦後、米軍が市役所できたと証言している。

遺骨処理状況

(ホ) 事業場側証言 火葬にし生存者送還時俸接した。

民間調査(1) 神戸慰霊実委(委員長阪本勝―兵庫県知事)一九五七年に、当時の事業場関係者、寺院等を調査したが、「十分な要領を得ることが出来なかった」(同委員会の「報告書」)

(2) 現在全港湾労組神戸支部が調査している。

(3) 中央慰霊実委が日華労務協会の手により連行された中国殉難者の遺骨の行方を追求し、一九五七年千葉県白子町安住寺にあるのを発見したが、本事業場における日華労務協会連行の一三三名のうち死亡者は本名簿4番兪詳興であり、その発見した遺骨の中に兪詳興の遺骨はあるものと認定した。」

#### ●出身地・年齢

次に、連行された中国人の出身地と年齢について、『神戸港報告書』より整理すると以下のとおりである。

#### ①福昌華工(特別)

一次の二一〇人については事業所報告書に名簿がなく、出身地、年齢とも不明である。



二次の二〇三人については、山東省一三〇人、河北省三二人、江蘇省二九人、安徽省五人、河南省二人、湖北省二人、奉天省、閩東省、大連が各一人である。年齢は一八歳から五一歳までで平均年齢は三二歳となっている。

②日華労務（自由）

三次五人、四次五〇人、五次三二人の計一三三人については、上海一〇四人、江蘇省一〇人、河南省九人、浙江省六人、天津二人、河南省、不明、各一人、年齢は一七歳から五七歳までで平均年齢は二八歳である。

③華北勞工協会（六次訓練生、七次行政）

六次三〇〇人については、河南省二二五人、山東省三八人、四川省一人、湖北省一〇人、陝西省八人、安徽省三人、湖南省三人、江蘇省、河北省、各二人、奉天、甘肅省、察哈爾、各一人で、年齢は一七歳から五二歳まで、平均二五歳である。

七次一五〇人については全員が河北省出身で、年齢は一六歳から五四歳、平均年齢は三二歳となっている。

●死亡者・負傷者

神戸における死亡者についてはすでに述べたが、前掲『外務省報告書』（『資料 中国人強制連行の記録』、五九三頁）には、死亡原因として、公傷二人、伝染病四人、一般一人とある。

神戸から更に函館、敦賀、七尾に連行された三三〇名のうち、函館で四八名、敦賀で一名、七尾で三名が亡くなっている。神戸港に強制連行された九九六名のうち名簿のある七八六名については、合わせて六九名が亡くなったことになる。

函館で亡くなった四八名は以下の通りである。

仇正山、李文、唐志成、邵嗣恒、陸阿華、李林江、趙杏生、張竹明、李福根、王保悲、華阿狗、任其祥、揚少慶、莊則榮、王德康、曹慶元、趙順発、朱栄根、範純如、姜桂慶、陳炳榮、揚植枝、応龍、胡仁芳、趙振麟、胡伯年、杜鶴鳴、周三男、胡金業、李悟真、王阿毛、周雲鶴、張松延、鄭木慶、夏新根、馮樂忠、朱生濤、趙金栄、金祖源、曹洪祥、魏裕錦、呂孟康、金生、沈新高、湯安生、翁伯年、張竹軒、張阿貫。<sup>13</sup>

函館へ再び強制連行された一三〇名のうち四八名が亡くなったというのは驚くべき数字である。

負傷者についても名簿のある七八六名については、事業所報告書に記載があるが、それがどこまで事実を反映しているかは不明である。

『外務省報告書』の総括表（『資料 中国人強制連行の記録』、五一五頁および六三二頁）によると、負傷者数一三人、罹病者数四一人、不具疾病者数二人、そして公傷・重傷は三人で、死亡二名、不具疾病者二名、私傷・重傷は一名となっている。

一方神戸港から直接あるいは敦賀経由で七尾に再連行された中国人から一八名の失明者がでてゐる。

敦賀経由の中国人は、李雲中（右目）、王庭（左）、郭豊亭（両眼）、張春榮（両）、呂洪山（両）、朱同喜（左）、蘭福安（左）、張榮軒（両）、七尾直行の中国人は、王文義（両）、呉満星（右）、張榮礼（両）、徐福堂（両）、候玉成（右）、郭保如（両）、周林（両）、劉改成（両）、馮克儉（両）、婁岐山（婁本正、左）の合計一八名である。「現地調査覚書」の「失明患者続出ニ就テ」という項では、「転入華労中ニ於テモトラホーム患者ガオリ、失明セル者ノ殆ドガ之等華労ナリ」（『外務省報告書』、『資料 中国人強制連行の記録』、三九頁）と言いつてしている。一九九六年八月に訪中して聞き取りをした石川県グループによると、神戸から七尾に強制連行された房照云（一九八八年死亡）の弟・房照順は、「七尾では目が悪くなった人がたくさんいたそうで、失明した人も六四人いたのですが、港で同じような仕事をしていた神戸ではどうでしたか」という質問に「失明者は一〇人程いた」と答えている。<sup>44</sup>

一次で連行された李興旺は、神戸港事業場報告書によると脊髄骨折（「私傷」）の重傷を負い戦後、入院を理由に「残留」となっている。この李興旺かも知れない中国人の消息を、後述する中国人宿舍の新華寮の近くにある隈病院で伺った。隈病院は死亡者のうち二名の死亡診断書をかいている病院だが、筆者が隈病院を訪問して元事務長・坂口吉弘（一九二二年一月二日生）から伺った話は以下のとおりである。坂口は復員後一九四五年一二月七、八日頃から隈病院に勤務したが、一九四六年夏ごろ隈病院に入院していた中国人を白浜の国立療養所（温泉病院？）へ連れて行つた。坂口は彼と仲が良かった。付添は坂口の他、神戸市より二名、中国人の世話人一名であったという。<sup>45</sup>

またおなじく一次の趙学信には、右足切断（公傷）の記録が残っている。言いつの多い『神戸港報告書』でも「傷害殊ニ公傷発生状況及ソノ原因」として、「何レモ作業中船内ニテ受ケルモノニシテ華労自身ノ不注意ト言語ノ不通ニヨリ生ジタ場合多シ」（一〇七頁）と書いている。

## ● 宿舍

『神戸港報告書』によると中国人の宿舍は、次の四ヶ所があった。

①三友寮／神戸市生田区中山手通七丁目八五九。三二四坪四合／□□（判読不明）二階建三棟、平屋建二棟／建坪二四八坪五合、福昌二〇三名、元

日人港湾労働者三〇〇名ノ宿舍ヲ改造転用セルモノ」

②萬国莊ノ第二次北支工一五〇名、「元映画館ヲアパートニ改造セルモノ」。一九四五年三月一七日の空襲後、「強制家屋疎開」により四月一日に一五〇名は新華寮に移転した。

③新華寮ノ神戸市生田区北長狭通七丁目五八。「元日人港湾労働者三〇〇名ノ宿舍ヲ改造転用セルモノニシテ諸施設完備セル申分ナキ宿舍ナリ」とある。現在のJR神戸駅より東約四百メートル。宇治川商店街南入口の少し東、現在のライオンズマンション付近。

一次の三〇〇名は四五年二月一五日に九九名が敦賀へ、四月二七日に一〇〇名が七尾へ移り、一〇〇名が残っていた新華寮に先の萬国寮より一五〇名が入ったのであるが、これも三月一七日の空襲で三分の一が焼失し、次の海岸宿舍に移転した。

一九四九年七月神戸に來た黄国明は、「港と宿舍の往復しかなかったのどこが宿舍か分からない」とのことだったが、『神戸港報告書』の平面図によるとこの新華寮にいたと考えられる。吹き抜けがあったという黄の話は凶面の中庭のことだと考えられる。<sup>(46)</sup>

新華寮は、戎井旅館を接収したものであるが、同旅館の経営者であった戎井隆寿は、「衛生状態が悪く、風呂にも入れないので、その体臭は実にものすごく、近隣の人から苦情が出るほど」だったと回想している。<sup>(47)</sup>

④海岸宿舍ノ同じく四五年三月一七日の空襲で焼失した栄町通五丁目貿易会館跡を急遽修理して八月三日新華寮より移転した。

### ●企業への補償

『事業所報告書』および『外務省報告書』は中国人に強制労働をさせた企業が自らの責任をのがれ、かつ日本政府に対して中国人を「雇用」したことから受けた「損失」を補償してもらうことも目的としていた。そのため中国人を「雇用」したことから得た利益と経費を計算して、その「損失」を補償してもらったのである。

『外務省報告書』には、「……政府補償ヲ入ルルモ尚相当額ノ赤字ヲ示シ其ノ額ハ推定収入五三、九七七、四六六円ニ対シ支出ハ一九三、六四五、六四二円（内訳終戦前経費一二三、九七二、六三八円終戦後経費六九、六七三、〇〇四円）ニ上リ政府補助金五六、七二五、四七四円ヲ入ルルモ業者トシテハ八二、九四二、七〇二円ノ赤字トナリ居レリ」（『外務省報告書』一三三〜一三四頁）と、書かれているのである。神戸港についても、個別の計算がなされており、収入九九〇、二七〇円、支出一、七二一、八三三円で、損失総額は七三一、五六三円であると

している。

このような二一カ所の事業所をもった日本港運業会は、一二、六五六、九六二円を日本政府に請求し、その四二％にあたる五、三四〇、四四五円を得たのである。<sup>48</sup> 強制連行した中国人に対して補償を行なわなかった企業にたいしてこのような補償がおこなわれたのである。

#### 四・連合国軍捕虜等の場合

##### ●捕虜収容所

神戸港における連合国軍捕虜の実態については、前述の『三井倉庫五〇年史』などの中で断片的に触れられる程度であったが、朝鮮人・中国人強制連行の調査の過程で、その実態もより鮮明になった。兵庫県下の捕虜収容所は大阪捕虜収容所の管轄下におかれていた。県下の捕虜数は、一万六三六二人、神戸市内では五四五名であった。<sup>49</sup> 神戸市内の捕虜収容所は以下の三ヶ所と神戸捕虜病院である。<sup>50</sup>

##### ①神戸分所

別名「大阪捕虜収容所第二分所」で、当時の神戸市神戸区伊藤町二八、現在の東遊園地西側の神戸港郵便局およびその東側の駐車場のあたりである。<sup>51</sup> 一九四二年九月二日に開設された。同年一〇月段階で四〇〇名が収容されていたという記録がある。一九四五年六月五日の神戸大空襲で焼失したため丸山分所に避難したのち、同月一九日、脇浜分所に移動した。

##### ②川崎分所

別名「丸山分所」で、神戸市長田区丸山町二丁目、現在の神戸市総合療育センターの敷地にあった。一九四二年一月八日に開設され、四年五月一日に閉鎖されたが、同年六月の神戸空襲のとき、神戸分所および捕虜病院より捕虜が避難してきた。その後、捕虜は脇浜分所に移動したが、捕虜病院は六月一九日よりここで再開した。最大時には約六〇〇名が収容されていた。川崎分所の捕虜は、主に川崎重工艦船工場で労働した。

##### ③脇浜分所

一九四五年二月一〇日に開設され、米・英捕虜一九七名を収容した。同年五月二〇日に閉鎖（疎開）後、滋賀県米原分所に移動し琵琶湖干

拓事業に従事した。神戸分所焼失により六月一九日に再開した。七月一〇日、大阪捕虜収容所第二分所と改称している。

このように三ヶ所と言ってもこれらは同時期に並置運営されていたのではなく、それぞれ空襲によって移転を余儀なくされたものである。神戸市内の五四五人の捕虜の出身地を示す記録はないが、敗戦時に脇浜収容所に収容されていた捕虜四八八人の内訳は、イギリス、三六〇人、オーストラリア、七三人、アメリカ、二六人、中国、二人、その他、二七人である。捕虜の労働は、神戸船舶荷役、川崎製鉄、川崎重工業、川崎重工艦船工場、三井倉庫、住友倉庫、三菱倉庫、昭和電極、上組等で行われた。捕虜の待遇について、オーストラリア人のボイス軍医は以下のように書いている。

捕虜たちは、熱帯の東南アジアでの長い生活の後、日本へ来たので、インフルエンザにかかっている。日本人は高熱の者がいても、インフルエンザ対策にほとんど協力しようとしな。インフルエンザが広がり、分所内には毎晩咳音が聞こえている。年長の者は倒れて、死に直面している。<sup>(32)</sup>

衣服も充分なものが与えられなかったが、「一番つらかったのは冬の寒さだった。まともな靴がなく、ボロ布で足をくるんで作業に就いた。その足で雪を踏んだ時の乾いた音が、今でも耳に残る」(レイ・ブラウン)という証言もある。<sup>(33)</sup>

#### ● 捕虜病院

一九四四年七月に開設された神戸捕虜病院は、現在の神戸市文書館(旧南蛮美術館、神戸市中央区熊内町一丁目)の南にあった神戸中央神学校を日本軍が接収して使用していた。神戸分所と同じく四五年六月五日の神戸大空襲で焼失し川崎分所に移転している。その空襲のときのことを旧南蛮美術館の池永孟の娘高見澤たか子は、「南隣の神学校の建物に収容されていた米軍捕虜が、一階の隅の部屋に飛び火したのを消し止めてくれたのである」と回想している。<sup>(34)</sup>

この病院には、日本人軍医・大橋平次郎が勤務していたが、彼は、捕虜に「人間の尊厳を持って接してくれ」という。二〇〇二年三月に、当時、同病院に収容されていたアメリカ人軍医・マーレー・グラスマンが、大橋の消息を訪ねて、病床の本人の代理で息子・ジョン・グラスマンが神戸を訪問した。すでに亡くなっていた大橋平次郎自身とは会うことができなかったが、その息子と面会を果たした。<sup>(35)</sup>

●新聞記事

神戸の連合国軍捕虜に関して、新聞記事により経緯・状況等について考えてみたい。

比較的早い時期の新聞記事に次のものがある。<sup>56)</sup>

「米人抑留者今暁神戸へ／わが武士道精神で保護取締り

善通寺に収容中のグアム島作戦における俘虜に非ざる米人抑留者が今暁六時、神戸へ到着する、抑留者は政府関係者六三名、航空関係者五名、宣教師一三名、一般市民五四名の総数百三十五名で、うち婦人は七名、香川警察部員十名、憲兵三名と兵庫県外事課から受領に赴いた難波警部、刑部警部補が付添ひ、到着と同時に外事課の輸送トラックに分乗、内六十四名は神戸区北野町三丁目のバターフィールド・エンド・スワイヤ汽船会社宿舍へ、残り七十名は旧居留地伊藤町のシーメンス・ミツシヨーン・インステイチウトへそれぞれ収容され、日本の庇護のもとにおかれる。」

また、捕虜収容所の東、神戸市役所の南にある東遊園地で「憩う」アメリカ人捕虜の写真を大きく掲載した記事もある。<sup>57)</sup>

「芝生で日向ぼっこ／ほっと一息／抑留米人神戸の第一日

二十三日朝神戸に送られてきたグアム島の米人抑留者百三十二名は神戸到着と同時に一班五十六名は神戸区北野町一丁目のバターフィールド・エンド・スワイヤ汽船会社の寄宿舎へ、他の一班七十六名は旧居留地伊藤町のシーメンス・インステイチウトへそれぞれ収容され、この日から寛大な皇国の庇護のもとにおかれることになった、輸送の大任を果たした県外事連絡係の難波警部から視察係の□警部へバトンは移され、ここに彼らの港都での抑留生活が始まったのである。」

イギリス人捕虜については、次の記事がある。<sup>58)</sup>

「英俘虜一行、神戸の収容所へ

陸軍輸送船リスボン丸で内地護送中鬼畜の如き米潜水艦の襲撃を受け全員溺死の憂目から皇軍の恩讐を越えた救護で九死に一生を得た英俘虜一行は十一日神戸に到着、俘虜収容所に入った、十二時五十分神戸駅に降り立った俘虜〇〇名は肅然と東遊園地へ。

東遊園地では森本安浩中尉の前に整列、閲兵を受け、□子はこれより俘虜収容所に入る、□子の□□健闘は認め逃亡の意なく規律に従ふものは同情をもって□子の軍人たる名誉を尊重して公正に取扱ふものである」と恩威両全の訓示に深く頭を下げて一小隊毎に、日本軍の軍律に

従ひ逃亡せず”の宣誓に右手を挙げて誓ふ、次で所持品検査を受けかくて市民の注視を浴びながらロンドンの英俘虜は肅々と収容所に入った。」

### ●民間人抑留所

一方、神戸市内の民間人抑留所の存在も明らかとなっている。神戸警備隊中部第四六部隊に勤務していた松本充司は、当時巡回で使用していた収容所の配置を記した地図を保管していた。そこには警備隊、重要施設・工場、消防署、警察署、食糧集積所、緊急避難所が示されているが、その他に第一から第四までの民間人抑留所が記載されている。松本氏は一九四四年一月から約一年間警備隊の任務についていたが民間人抑留所について「人数と国籍を確認するために巡回したが、あとの生活環境など（の取締り）については警備隊の管轄外だった。青谷にある乗馬クラブの隣の大きな家が一般の第一抑留所だった。そこは二回、兵隊と一緒に巡回した」「人員書（名簿）は申し送りで次に渡した」と証言している。<sup>⑩</sup>

### ●ジョン・レインのケース

先に紹介したように元オーストラリア兵捕虜ジョン・レイン (John Lane) は、神戸捕虜収容所に関して貴重な記録『夏は再びやってくる（原題、*Summer Will Come Again*）』を残している。以下、これによりジョン・レインのケースを紹介する。

一九二二年イギリス生まれのジョン・レインは、三二年オーストラリアに渡り三八年フェアブリッジ農場学校を卒業後、四一年オーストラリア帝国軍隊に入隊した。アジア・太平洋戦争開戦後、オーストラリアを出発して数週間もたないうちに四二年二月一五日、「シンガポール陥落」により一〇万人の捕虜の一人となり、チャンギー収容所に収容された。四三年六月八日、下関経由で神戸に移送された。捕虜生活を通して秘密裡につけていた日記があり、それをもとに神戸での捕虜生活について詳細な手記を書いている。

レインは、神戸分所に入った翌日から日本語の号令で訓練を受けた。

（三井）高浜（倉庫）、神戸船舶荷役などの日本の会社は、捕虜にとつて、コールズやウルワースといったような会社の名前と同様、すぐなじみ深いものとなった。これらの会社の倉庫はいずれも大きく、人工的に作った海岸沿いの敷地に点在しており、捕虜のオーストラリア兵のほとんどがそこでの労務を命じられた。

吉原製油所では「盗み」が発覚して営倉に入れられこともあったが、生きるためにピーナツなど巧みに盗み出している。空襲警報に日本の敗北が近いことを感じとっていた。

一九四五年六月五日の神戸大空襲で神戸分所は焼失して通称丸山分所に移動した。その後脇浜收容所に移動してそこで終戦を迎えた。八月二四日にはそこで祝賀行事が行われ、民間人抑留所にいた人々も加わった。そして九月六日、神戸三宮を出発して横浜、厚木基地、沖繩嘉手納基地、フィリピンを経由して、一〇月一三日シドニーにもどった。

ジョン・レインは二〇〇四年五月、訳書の出版記念会に再び神戸を訪れたとき、「私は神戸というこの街での私の経験を、皆様に語らなくてはならない使命を負っている」と語っていた。<sup>(61)</sup>

彼は、資料をオーストラリア戦争資料館に寄贈している。空襲で崩壊した神戸收容所の写真も含めて、同館のホームページで閲覧することができる。<sup>(62)</sup>

また同じくオーストラリアの捕虜レイ・ブラウンは、一九四三年五月から神戸の捕虜收容所に入れられていたが、彼について次のような記事がある。「神戸の收容所は、三階建の倉庫を改装したものだ。ブラウンらに与えられた主な仕事は、港での荷役作業。米や大豆、砂糖などの食糧を積んだ貨物船が、アジア各地から入港してきた。一人の荷役量は、一日で十二トンにもなった。身体中が痛んだが、一番つらかったのは冬の寒さだった。まともな靴がなく、ボロ布で足をくるんで作業に就いた。その足で雪を踏んだ時の乾いた音が、今でも耳に残る。」<sup>(63)</sup>

## ●帰国

神戸市内の收容所のところで述べたように、捕虜病院は別にして、唯一残された脇浜分所で四八八名（イギリス三六〇名、オーストラリア七三名、アメリカ二六名、中国二名、その他二七名）が、一九四五年八月一五日をむかえることとなった。

先のジョン・レインは、九月六日に神戸を発ってオーストラリアに向かったが、それぞれの捕虜は、祖国に帰ったのである。

連合国軍捕虜とともに学徒動員により川崎重工艦船工場で働いていた塚本茂は、工場で八月一五日「玉音放送」を聴くことになるが、「米・英軍の捕虜を当時、神戸・会下山にあった憲兵隊が監視し、使役していた。そして、『缶詰』と称し、三日三晩、不眠不休の作業を強制された時もあった。」<sup>(64)</sup>と回想している。



## 五．まとめ

神戸港における戦時下朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜の強制連行・強制労働について、まだまだ不明な点も多いが、調査する会の活動によりおぼろげながらその実態がみえてきた。ここでは、網羅的に資料を集め、出来るかぎり理解しやすいように整理し紹介した。

神戸に生まれ育った筆者も、一九九〇年代までこれらの事実を知らなかった。アジア・太平洋戦争の時期に、もちろん日本人も困難な状況におかれたが、朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜は、より過酷な状況におかれていたのである。

二〇〇八年七月二一日、神戸港にほど近い神戸市中央区海岸通のKCCビル（二階に神戸華僑歴史博物館がある）前に（神戸港 平和の碑）が建立された。歴史が書物等に記録されるとともに、日英中朝、四ヶ国語で歴史が次のように刻まれている。<sup>64</sup>

「アジア・太平洋戦争時期、神戸港では労働力不足を補うため、中国人・朝鮮人や連合国軍捕虜が、港湾荷役や造船などで苛酷な労働を強いられ、その過程で多くの人々が犠牲になりました。私たちは、この歴史を心に刻み、アジアの平和と共生を誓って、ここに碑を建てました。」

二〇〇八年七月二一日 神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」

この石碑は、アジア・太平洋戦争下の神戸港における歴史の一断面を記憶にとどめるために永く保存されるものと思う。

### 注

(1) 神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会（代表・安井三吉）のホームページは、<http://ksyc.jp/koboport/>

(2) 朝鮮人・中国人について強制連行がなされたことについては異論がないと考えられるが、連合国軍捕虜に対して強制連行という用語が用いられることに異論があるかもしれない。筆者は、連合国軍捕虜についても日本軍により捕虜として自由を奪われて連行され強制労働に従事させられたものであるので、強制連行ととらえることができると考えている。

(3) 金英達「一九四六年『厚生省名簿』が日の目を見る―兵庫県分一万三千余名のリスト―」（兵庫朝鮮関係研究会『在日朝鮮人90年の軌跡―続・兵庫と朝鮮人―』一九九三年、神戸学生青年センター出版部、一二四―一三九頁、所収）

(4) 原本は東京華僑総会が所蔵。復刻版を神戸・南京をむすぶ会が一九九九年に刊行している。

(5) ジョン・レイン（平田典子訳）『夏は再びやってくる―戦時下の神戸・オーストラリア兵捕虜の手記』、神戸学生青年センター出版部、二〇〇四年。

- (6) 他に、①飛田雄一「戦時下神戸港における朝鮮人・中国人強制連行」覚え書き、『むくげ通信』一七七号、一九九九年十一月、②安井三吉「記憶」の再生と歴史研究『現代中国研究』十二号、現代中国研究会、二〇〇三年三月、③飛田雄一・安井三吉「神戸港にみる強制連行」『岩波講座・アジア・太平洋戦争』四卷所収、二〇〇六年二月、④飛田雄一「新聞記事にみる『神戸港の強制連行／強制労働』朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜」、『むくげ通信』二二六号、二〇〇八年一月）などがある。
- (7) 『神戸市史』第三集産業労働編（一九六七年）六七五～六七八頁。ここでいう「事業場報告書」は後に紹介する『神戸港報告書』のことである。
- (8) 『新修神戸市史 歴史編Ⅳ 近代・現代』（一九九四年）、八七二～八七三頁。
- (9) 神戸市「神戸開港百年史 港勢編」（一九七二年）、七六三～七六四頁。その他、財団法人神戸港湾福利厚生協会「収録港湾労働神戸港」（一九八八年）の「戦時下の港湾と統制会社」では、のちに紹介する神戸港運株式会社について当時の関係者の回顧談も掲載しつつ詳述している。朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜に関連する記述は一九四四年五月の神戸港湾荷役改善協合理事会で「中国人労働者の合宿所設置は、団体訓練などの必要なときでもあり、是非実現したい」という議論がなされたことだけが書かれている。丸谷喜市（神戸港はしけ運送事業協同組理事長、神鋼海運株式会社代表取締役会長）の回顧談のなかに「脇浜の俘虜収容所に爆弾がおとされたこと」が港運時代の特に記憶に残ったこととしてあげられている（五二頁）。労働者側の記録として『闘いは時を越えて―全港湾関西地本四〇年誌―』（関西労働旬報社、一九八九年）の「戦時下の港湾労働者」（四八～五一頁）にも朝鮮人等に関連する記述はない。
- (10) 『兵庫警察史』二二一～二二三頁。『暗黒日記』（岩波文庫）にこの部分はないが、ちくま学芸文庫『暗黒日記1』（二〇〇二年）二六七～二六九頁には記載されている。
- (11) 『川崎重工業株式会社社史（本史）』（一九五九年七、七六一頁。この社史には朝鮮人の宿舍の写真が三点掲載されている。いずれも一九四三年のもので、第一本山寮、第二本山寮、西垂水寮である。西垂水寮は、筆者（一九五〇年生まれ）は高校時代に、舞子から山陽電車で兵庫駅まで通っていたが、当時まだそのときの建物が残っていたのを記憶している。
- (12) 『川崎重工業株式会社社史（年表・諸表）』一九五九年、一〇八頁。
- (13) 『三菱神戸造船所五十年史』（一九五七年）、二八頁。
- (14) 三菱重工業株式会社神戸造船所発行『和田岬のあゆみ（中）』（一九七三年）、二八一～二九二頁。
- (15) 朝鮮人強制連行については、山田昭次・古庄正・樋口雄一「朝鮮人戦時労働動員」岩波書店、二〇〇五年、参照。
- (16) 労働省記者会見発表資料、一九九〇年八月七日、朝日新聞等参照。
- (17) 前掲金英達論文参照。
- (18) 前掲調査する会『記録』（明石書店）、三三～四二頁。
- (19) 神戸新聞、一九四三年七月二九日。
- (20) 戦後のことであるが、この船舶荷役株式会社は、一九四六年一月二八日、強制連行した朝鮮人の未払い賃金、七人分、二、五六八円二三銭を神戸供託局に供託している。国立公文書館つくば分館所蔵「経済協力・韓国一〇五」「朝鮮人に対する未払い賃金・債務等に関する調査集計」（労働省）G1-33-3451
- (21) 川崎重工業株式会社社史編さん室編『川崎重工業株式会社社史（本史）』、七六一頁。
- (22) 朴球會の証言は、朝鮮人強制連行真相調査団「朝鮮人強制連行調査の記録―兵庫編」（一九九三年一月）六一～六二頁および前掲調査する会『記録』、一〇五～一〇六頁、参照。
- (23) 高等法院検事局『朝鮮検察要報』第十号、一九四四年十二月、前掲調査する会『記録』一二四～一二七頁所収。他に、「応徴士並家族の言動」として、「先輩応徴士の

通信に依ると、食糧不足と衣料不足に依り困難する外、応徴士を満支人苦力の様に使役し、中には逃走する者、工場側と喧嘩し留置されるもの等言葉に余るものある由我々は徴用と言へば地獄にでも引張り込まれる様な気がして、当局の命令なればこそ己むなく応ずる訳だ（応徴士）。／最近内地は敵の空襲を受け、各工場に従業員した工員は殆んど骨も拾へぬと言ふことだが、内地に徴用された者は更に郷里に帰る事は出来ないから之が最後の別れです（家族）。」

(24) 孫敏男「川崎重工業製鉄所重合工場―厚生省名簿―について」、前掲調査する会『記録』、四四〇～四五頁。

(25) 孫敏男「川崎重工業製鉄所重合工場に連行された鄭壽錫さんの現地調査報告書」、同『記録』、八六〇～九八頁。

(26) 内外労働研究所「内外労働週報」五四〇号、一九四三年一月二十九日、同『記録』、一一八〇～二二三頁所収。

(27) 金仁徳編著『強制連行史研究』景仁文化社、ソウル、二〇〇二年、一五三～一五五頁、二四〇～二四二頁。

(28) UNDER THE BLACK UMBRELLA: Voice from Colonial Korea, 1910-1945 by Hidy Kang, Cornell University Press, 2001 邦訳は、ヒルデイ・カン著、桑畑優香訳『黒い傘の下で―日本植民地に生きた韓国人の声』二〇〇六年九月、発売元・ブルース・インターアクションズ、二二二～二三三頁。

(29) 神戸新聞、一九四四年五月二三日。さらに以下のように続いている。「体力の錬成に加えて精神教育を主眼とする寮長以下教官の必死な努力は僅か一ヶ月で「産業戦士の資質付与」という目的を立派に達成、押迫った年の暮れに大手寮の窓硝子は時ならぬ歓声によってビリビリと震えた、十八歳から二十八歳までの半島若者七十五名の顔はみな明るい歓喜の色が□つた。／職場での熱心さには頭が下がります、殊に指導員や先輩工員への信頼から湧き上がる忠実さや、服従心の旺盛なことは予期以上のものです。／寮には看護婦さんもいるのだが、公傷病は病人の監視に「苦労だ」といふ、それは公傷で生爪を剥がした患者や、三十八、九度の発熱患者が、少しでも油断してゐるとこっそり抜け出して工場へ行ってしまうからである。聖戦完遂に増産が如何に大きな役割を持ってゐるかを、徹底的に認識してゐるのだ。毎晩十一時半には寮の各部屋を廻つてみるのですがこれがまた私の嬉しい仕事の一つです、毛布の何も蹴飛ばして、健康な寝息を立ててゐる無邪気な訓練工たちの姿に、一日の労苦を感謝しながら、一人々に毛布を着せかけてやるのですが、何ともいえない気持ちです……」／XX医大在学中に教授と口論して自ら退学し、日大に移つたという快男児の寺井寮長はお医者者の勉強をしてゐるだけに、生理衛生学は玄人だし、寮長として満点だ(つゞく)多木生」

(30) 神戸新聞、一九四四年五月二四日。

(31) 神戸新聞、一九四四年六月一日。

(32) 神戸新聞、一九四五年一月二日。以下、つぎのように続く。「新参にして既に斯くの如しだ、先輩たちの敢闘振りを覗へば感激させられる話題の数々を生んでゐる、だからこの新参到着の報を聞いただけで各部の現場からはその配置を競願して労務課員に嬉しい悲鳴を上げさせたものだ、半島出身者たちはすべて「訓練工」の名のもとに現場に配置されている、この訓練工の配置があるところ工員も学徒も、勤労隊員たちも激励させられまた協力精神を促進させられるのである。／ある部はそのために二〇〇%の能率を上げてゐるト木金求君は足部に負傷しても翌日敢然と職場を堅守、南原?君と金原龍幹君は母の死亡の手にしても「帰らぬ」と頑張つたうえ爾来六ヶ月を皆勤して半島出身者の意気を示し、松谷吉球君は鋼塊引出器ほか二点の新工夫をして努力不足を補い安全感を与えて作業能率を上げたため表彰された錦川三植君は輸送に挺身奮闘して特に近畿管理部から感謝状を贈られたりなど四十七名からの表彰者をだしてゐる、朝七時から十二時間の現場作業後さしもの健体にも相当こたへるところがあるのだが、一同の必□の信念はこれを苦痛とせ□めないのだ。／昨年来にはこのうちから初めての入営兵九名を送り陸海軍志願兵も十数名数へる、大江中尉を寮長とする打出寮における日ごろの訓練から湧然と絶えざる生産意欲を湧き立たせてゐる、この訓練工たちは全くこの工場の生産特攻隊とも見られるのだ。」

(33) 毎日新聞、二〇〇〇年七月二三日。

(34) 前掲金仁徳編著書『調査する会「いかり」一〇号(二〇〇八年一月)』に堀内稔が翻訳・紹介している。

(35) 『外務省報告書』といわれているのは、『華人労務者就労事情調査報告書』で、①要旨、②別冊(事業場概要)、③第一分冊(第一部、移入・配置及送還事情)、④第二分冊(死亡・疾病・障害及関係事情)、⑤第三分冊(就労事情・紛争及就労成果)よりなる。田中宏・松沢哲成編『中国人強制連行―「外務省報告書」全五分冊ほか―』

現代書館、一九九五年、に解説とともに収録されている。

- (36) 『外務省報告書』は長く日本政府によってその存在を否定されていた。田中宏・内海愛子・新美隆編『資料 中国人強制連行の記録』（明石書店、一九九〇年）所収の内海愛子「中国人強制連行の名簿について」（六五五〜六五八頁）によると、「現在それはございません。ないことだけは確かであります」（一九五八年四月九日、衆議院外務委員会での松本政府委員の答弁）、「一度外務省には詳細に個人名を並べた収容所調査簿があったわけですが、それが終戦直後焼失いたしました。現在その詳細なものがないことは確かでございます」（同年七月三日、同委員会）と答弁している。また、NHK取材班『幻の外務省報告書―中国人強制連行の記録』（日本放送協会、一九九四年）参照。

- (37) 中国人強制連行については、杉原達「中国人強制連行」岩波書店、二〇〇二年五月、参照。

- (38) 前述「神戸港報告書」より。また、兵庫県殉難中国人慰霊実行委員会「一九五七年二月一日中国紅十字会代表団来神記念 兵庫県殉難中国人慰霊と殉難詳報」（前掲調査する会『記録』二二一〜二二六頁に再録）および同実行委員会「爪跡を探る―神戸港・中国人殉難略記」一九六一年三月二四日、がある。

- (39) 『外務省報告書』によればこのうち四七七名が死亡。『資料 中国人強制連行の記録』の「名簿」では四八八名となっている。

- (40) 敦賀への中国人強制連行については、橋本一郎「中国人強制連行と敦賀港」、「気比私学―結成二十五周年記念誌」二〇〇五年一月、参照。七尾については、平和へのうねり・いしかわ友好訪中団編・発行『痛苦の証言・50年を越えて―七尾強制連行の生存者を訪ねて―』一九九七年、および角三外弘「七尾への中国人強制連行―地域から戦争加害を考える―石川県地方自治研究センター、二〇〇〇年、参照。

- (41) 『日本海事新聞』一九四四年一〇月二二日に「神戸港特殊労務者近く到着」〔神戸支局発〕神戸港において受入れる特殊労務者五百名は予定より約一ヶ月半遅れ本月中旬到着協浜国民学校跡へ収容、荷役作業に従事することとなった」という記事がある。人数が合わないがこの記事は六次、七次のものをさしているものと思われる。同年一二月三日の同新聞には、「来る五日の酒田港二〇〇名を第一便に、小樽二〇〇名、新潟三〇〇名、神戸一五〇名都合八七〇名が十日頃までに受入港湾に全部到着する予定である」とある。

- (42) 中国人殉難者名簿共同作成委員会「中国人行方不明者名簿」（一九六〇年二月）

- (43) 陳炳榮は、『名簿』（資料 中国人強制連行の記録）五六六頁）によれば一九四五年十一月二日死亡となっている。この一名が『外務省報告書』にカウントされていなくて同報告書では四七七名となっているようだ。前掲『中国人殉難者名簿』には、神戸から函館に移送されたものも含めて計六八名の死亡者の名簿が掲載されている。

- (44) 前掲「痛苦の証言・50年を越えて―七尾強制連行の生存者を訪ねて―」、三三頁。

- (45) 一九九八年一月九日、筆者のインタビュー。前掲調査する会『記録』一七四〜一七五頁参照。中国人の世話人一名は、世話人として残留したという馬宝元の可能性がある。西出政治「戦後の港湾労働」（『歴史と神戸』四四号、一九七〇年一〇月所収）に「Fさん（のところに）は終戦後も以前使っていた俘虜が時々呼びに来た。そして日本人は食べ物に困っているだろう、と自分たちで作ったマントウやたばこなどを、何度か貰って家に帰った。昨日までの主客が転倒した。病気だった俘虜の一人は終戦後も山手の隈病院に入院していて、後に和歌山の白浜温泉に治療に行ったと聞いたが、その後の生死はわからない」という文がある。

- (46) 黄国明さんはまた「空襲のときガード下に逃げこんだ」ことを覚えているというが、それが新華寮からすぐ南にあるガードのことか作業中の波止場から逃げこんだ別のガードのことかは分からないようだ。黄国明さんの証言は、前掲調査する会『記録』一六二〜一六四頁および調査する会『いかり』一号（二〇〇〇年二月二〇日）四五頁にある。また黄国明の来神時の様子については、一九九九年七月二八日の朝日新聞および神戸新聞参照。

- (47) 日本中国友好協会生田支部『日中いくたニュース』第二号、一九七六年五月。戎井は、その後も死亡した一七人の遺骨を探す活動を続ける。「中国人一七人の遺骨探し／心の日中戦終結を／友好運動の二老人訴え」、朝日新聞、一九七八年二月一〇日、参照。

- (48) 『外務省報告書』、『資料 中国人強制連行』、七八〇〜七八三頁。

- (49) 茶園義男編『大日本帝国内地俘虜收容所』不二出版、一九八六年。
- (50) 以下、連合国軍捕虜関係の引用は、福林徹『大阪捕虜收容所について』(二〇〇二年六月、調査する会講演会での講演資料)より。この資料をもとに平田典子が前掲調査する会『記録』二九〇〜二九三頁で整理をしている。
- (51) 調査する会『記録』二九一頁では、三井生命ビル周辺仲町通りに面した所、元ドイツ総領事館一東町としたが、誤りであった。道路を挟んで北側の「神戸港郵便局およびその東側の駐車場」が正しい。これは、二〇〇七年一〇月に来神した元イギリス軍捕虜・デニス・モーレイが神戸分所を再訪したときに調査する会とともに確認作業を行なった。デニスの記憶および資料から、訂正をおこなった。デニスは、「毎日二時間、神戸港で米や豆などの荷物の運搬に従事した。休みは月に一回。『人間として扱われず、労働の頭数にすぎなかった』という」(朝日新聞、二〇〇七年一〇月一三日)
- (52) ジョン・レイン前掲書、一〇八頁。
- (53) 神戸新聞、一九九二年二月二〇日。
- (54) 高見澤たか子『金箔の港―コレクター池永孟の生涯』筑摩書房、一九八九年、三〇六頁。中央神学校について、中央神学校史編集委員会編『中央神学校の回想』、聖燈社、一九七一年一二月がある。この神学校は賀川豊彦が卒業したことが知られているが、韓国では多くの卒業生が神社参拝に反対した神学校として知られている。
- (55) 毎日新聞、二〇〇二年三月二九日。調査する会ブックレット、二九〜三〇頁に、平田典子によるマレー・グラスマンの息子ジョン・グラスマンの聞き取りがある。
- (56) 神戸新聞、一九四二年一月二三日。
- (57) 神戸新聞、一九四二年一月二四日。
- (58) 神戸新聞、一九四二年一〇月一三日。
- (59) 前掲調査する会『記録』二八二〜二八三頁。また松本充司は、連合国軍捕虜関連の地図を保存されており、その地図は調査する会に寄贈された。また調査する会ワイールドワークに参加されたとき、「毎朝、百三十人ほどのオーストラリア兵捕虜を三宮の東遊園地に集め、捕虜の将校に、虐待を受けていると抗議を受けたこともあった」と発言している。神戸新聞、二〇〇二年一〇月一六日、参照。
- (60) ジョン・レイン「神戸捕虜時代をふりかえって」、調査する会編『いかり』九号、二〇〇四年七月。ジョン・レインの来神に関しては、神戸新聞、二〇〇四年三月一三日、参照。
- (61) オーストラリア戦争資料館のホームページは、<http://casawm.gov.au>
- (62) 神戸新聞、一九九二年二月二〇日。
- (63) 神戸新聞、二〇〇二年八月一七日。たしかに、松本充司の連合国軍捕虜関係地図には、会下山の東に「憲兵分隊」が書き込まれている。
- (64) 石碑建立の経緯等については、室田元美「あの日、日本のどこかで―神戸港 平和の碑、兵庫県神戸市―」、月刊『自然と人間』一四七号、二〇〇八年九月、飛田雄一「歴史を刻む―神戸の外国人―」、神戸地区県立学校人権・同和教育研究協議会『えんぴつ』三一号、二〇〇九年二月、参照。